

2 事例

3歳児【不思議編～なりきる編】

ダンゴムシを探そう ～ダンゴムシになろう

春に見つけたダンゴムシ。飼育ケースに入れて世話をした様々な経験から、命を大事にしようとしたり、誕生会の出し物披露や運動会の競技に「ダンゴムシになる」と自分たちの思いを伝え合いながら表現遊びや運動遊びに発展したりと、意欲的に取り組んでいった事例。

エピソード1 「ダンゴムシを探そう」（4月下旬～）

園庭で遊んでいた子どもたちがダンゴムシを見つけた。
「いたいた、ダンゴムシ。」「虫かご取ってくるね。」
「どこにいた?」「私も見つけたい。」「こっちこっち。」
大興奮の様子でダンゴムシ探しが始まった。砂場や草陰、プランターの周りなど必死で探す子どもたち。
「いた?」「いない。」「どこにいるのかな?」
と様々な声が聞かれた。
そろそろあきらめかけそうだったので、
そっとプランターを
持ち上げて場所をずらすと、
「うわあ!いたいた。ダンゴムシ見つけた。」
「いっぱいいる。」「あかちゃんダンゴムシ。」
と、大騒ぎになった。そのうち、
「こっちの下にもいるんじゃない?」
と園庭中のプランターを動かしてダンゴムシを捕まえたため、2つの虫かごに入れて保育室におくことにした。

エピソード2 「ダンゴムシを飼おう」（5月上旬～）

毎日見つけては、虫かごに入れてながめたり、数を数えたりしていたが、数日後、一方の虫かごのダンゴムシが全部死んでしまった。
「大変!ダンゴムシが死んでる。」「えー!かわいそう」「なんで死んだのかな?」
と口々に言い合っていた。2つの虫かごのうち、一方だけが死んでいたため、
保育者:「こっちとこっち、なにがちがうんだろうね?」
と問いかけてみた。
保育者:「ダンゴムシのベッドの色、一緒かな?」 A:「ちがう。」
B:「こちらは白いけど、こちらは黒。」
C:「あー分かった。こちらは砂だからだ。砂はすぐかわいてしまうんや。」
A:「じゃあ、こっちみたいに土のベッドにしてあげるといいんじゃない?」
と、砂と土が違うことに気付き、両方の飼育ケースに土を入れた。

B：「もしかしたら、おなかもすいてたんじゃないの？」

C：「そうだ、エサをあげないと。」 A：「エサって、何食べる？」

と、生きているダンゴムシに対して、これからどうやって世話をしていくとよいかを考える子もいれば、死んでしまったダンゴムシを見て、

D：「埋めてあげないと、かわいそう。」

と言う子もいた。みんなで、園舎裏の樹の根元に埋め、手を合わせてお別れした。その間に、飼育ケースの近くに絵本を置いておき、保育室に戻った際に目に付くようにしておいた。

A：「ダンゴムシの本がある。見せて見せて。」

B：「先生、読んで。」

の声に、さっそく読み聞かせをすると、どの子も興味津々で聞いていた。

「はっぱ食べるんやって。」「石も食べるんやって。」

「ぬれてるところが好きなんやって。」

と、新たに知ったことをみんなで確認し合っていた。

園庭に出て枯葉を拾ったり、小石を探したりしてダンゴムシのおうちを完成させていった。

男児が中心になり、毎日霧吹きで土を湿らせたり、小石を動かして生死を確認したり、時々枯葉を入れ替えたりしてダンゴムシの世話をした。年下の子たちがダンゴムシに興味をもって捕まえると、その子たちの虫かごに土を入れて

「はい、おうちできたよ。」

「はっぱも入れた方がいいよ。」

「石も食べるよ。」

と自分たちの経験をもとに、教えてあげようとする姿も見られた。

エピソード3 「ダンゴムシになって踊ろう」（6月中旬～下旬）

6月のある日、「お誕生会の出し物、何をしたらいい？」と子どもたちに問いかけた。いくつかの答えの中に、

「ダンゴムシになる。」

との声があった。ダンゴムシになって何をしたいのかを問うと、

「歌う。」「踊る。」

との答えが返ってきた。ダンゴムシの歌や踊りがあるかどうかは定かではなかったが、保育者が探してみることを伝えた。

翌日、

「ねえ、歌、あったの？」

と子どもはちゃんと覚えていた。自分たちが深く関わってきただけにダンゴムシで歌いたい、踊りたいという思いは強いのだろう。『だんごむしロック』という曲を見つけた。

曲を流すと、友達同士顔を見合わせながら笑みを浮かべ、体を動かし始めた。テレビ番組の

中にダンゴムシの表現があったり、身の守り方でダンゴムシのポーズで手足をばたつかせたりするという経験をしていることもあってか、

「こんなのしたら？」「それ、おもしろい。」

と自分たちで動きを考える姿も見られた。一部でも自分たちで動きを考えたことが自信になり、表現に対する取り組みがやる気につながっていった。また、誕生会には保護者の方も見に来られたため、自分たちの踊りを見てもらいたいという意欲につながり、見せた後には、満足感も味わっていた。

エピソード4 「レッツゴー、ダンゴムシ！」（9月）

運動会が近づき、競技について子どもたちと話し合ったところ、やはりここでも

「ダンゴムシになって走る。」

という声が上がった。お盆過ぎまでダンゴムシの世話をしてきた子どもたちにとっては、すべてのことがダンゴムシにつながっているようだった。

保育者：「いい考えだね。じゃあ、ダンゴムシの競走しよう。どんな競走がいいかな？」

A：「ダンゴムシは暗いトンネルを進むの。」 B：「高い石も上っていくし…」

C：「ちっちゃくなって（姿勢を低くして）歩くのはどう？」

D：「これは？（仰向けで手足をばたつかせる）」 E：「お面があるといいね。」

と、どんどん意見が出てきた。子どもたちの意見を取り入れ、トンネルをくぐり、マットの山をよじ登り、ダンゴムシのポーズをとるという具合に内容を決めていき、何度も挑戦するうちに、

「ダンゴムシのポーズになったら5まで数えることにしよう。」

とルールも子どもたちで決めるようになった。振り返り際には、

「おもしろかった。」「また明日もしよう。」

という意見だけでなく、

「もっとお山を高くしたい。」「トンネルがもっと長い方がよかった。」

と、さらに挑戦したいという意欲が感じられる意見もあった。

お面づくりでは、子どもからの意見で、黒の色画用紙を用意し、ダンゴムシの輪郭をかいておいたところ、すぐにはさみで切り始めた。

「目はどこにある？」

「口もあるけど、どこかわからん。」

「ダンゴムシは、線もある。」

と、これまで観察してきたことを生かしながらつくっていった。図鑑やダンゴムシの絵本を近くに置いておくと、悩んだときに本を見するという、前の経験を生かして、

「そうだ！調べてみよう！」

と、1ページずつゆっくり開きながら目や口がどこにあるかを探したり、殻の模様を確認したりと、それぞれが思い思いのままに楽しんだ。

運動会当日、自分たちでつくったお面をかぶり、自分たちで考えた競技に挑戦している姿は生き生きと輝いていた。

【考察】

身近なダンゴムシに触れながら世話をする中で、土と砂の違いに気付いたり命をつなぐための3歳児なりの気付きが見られたりした。園庭中を探したり、重いプランターを何とかして動かしたり、時には友達と協力して持ち上げたりと工夫をしながら手に入れたという思いが影響していると思われる。

また、誕生会の出し物や運動会の競技にも子どもたちからの案と興味が合致したものを取り入れたことで、意欲や活動に広がりが見られたのではないかと考える。

ダンゴムシ探しからいろいろな遊びに発展した中に、友達との関わりや自然との関わり、生命の尊重、数への関心、言葉の伝え合い、豊かな感性と表現等、様々な学びが見られた。

秋も深まってきた時期にも、時折、ダンゴムシの絵本を取り出して見たり、子ども同士で「踊り踊ったね。運動会おもしろかったね。またダンゴムシ探そう。」と話し合ったりする姿も見られた。

ダンゴムシへの関心と世話を続けた体験は、単なる知識の獲得にとどまらず、主体的に生き物や活動に関わり、友達と意見を出し合って進めていく楽しさを味わうことにつながったと思われる。

実践に向けて学ぶ視点

「ダンゴムシを探そう」という子どもの声を生かしながら、興味を持続し、表現遊びや運動遊びにつながっていった。

そこには、死んでしまったダンゴムシの虫かごとそうでない虫かごを比べるような声かけをしたり、絵本を近くに置いたりするという保育者の支援がある。また、曲を探したり、自分たちで動きを考えられる場面を設定したりと、子どもの思いに寄り添い、子どもと一緒に願いを実現しようとする姿も見られる。

3歳児にとっての虫探しは、ともすれば、探して飼って逃がしたり、死んでしまってお墓をつくったりして興味が薄れていくことが多いかもしれない。そういう体験も大切にしつつ、子どもの育ちの過程を踏まえながら、飼育からの気付きやイメージを広げたり、広がったイメージを実現する方法を考えたりする場面をつくったりすることも保育者の重要な役目と言える。

ピタゴラススイッチしよう!

どんぐりを転がして遊べるような装置（製作物）を出すと喜んで遊び始めた子どもたち。転がすだけでなく、装置をつくりたいとの声からピタゴラススイッチづくりが始まり、様々な学びが見られた事例。

エピソード1 「ピタゴラススイッチみたい」

どんぐりを拾ってきた後、子どもたちは、どんぐりを使ってそのままごとをしたり、転がしたりして遊んでいた。保育者のつくった転がす装置は一つしかなく、列になり自分の順番を待っていたため、自分でもつくることでより楽しめるのではと考え、「こんなのつくってみる？」と声をかけた。近くにいた数名の「つくりたい！」との声で、自分たちでもつくることになった。

廊下の壁に段ボールを貼り、トイレトペーパーの芯とガムテープを用意した。それだけで、

K 児：「テープちょうだい！」

と壁の段ボールにトイレトペーパーの芯を貼り始めた。一つできあがったものがあってことで、イメージがもちやすかったのか、何となく形になっていく。筒状のものを貼っていくと、どんぐりが転がる姿が見えないのと、トイレトペーパーの芯に限りがあったため、

保育者：「トンネルだけじゃなくて道路も作る？」

とトイレトペーパーの芯を縦半分に切ったものも用意した。すると、

K 児：「これも切って」

と貼ってあった芯も数個はがして持ってきた。切ると、次はテープを要求し、どんどんコースをつなげていった。しかし、芯がなくなってしまった。やりたい思いが強いからこそ、他のクラスへも聞きに行けるのではないかと思い、年長児のクラスにならあるかもしれないことを伝えた。恥ずかしがりながらも、R児を誘ってトイレトペーパーの芯と牛乳パックをもらってきたK児。戻ってくると、すぐさま、半分に切ってほしいと要求し、作り進めていった。

K 児：「ピタゴラススイッチみたいや！」

保育者：「そうだね、ピタゴラススイッチみたいだね。一回転がしてみてもいい？」

K 児：「いいよ！ここにこうなってくるんや。」

と得意そうに説明をしていると、他クラスの保育者がその姿を見て、

保育者：「K児君の目、キラキラやね。」

と声をかけてくれた。共感してもらえているという安心感からか、とても嬉しそうだった。片付けの時間になると、

K 児：「またピタゴラススイッチしたい！」

と言うので、うなずきつつ、金曜日だったため、翌週まで覚えているかどうか疑問だった。

エピソード2 「ピタゴラスイッチやりたい！」

K 児：「先生、今日ピタゴラスイッチやりたい！」

翌週の開口一番がこれだった。つくることを楽しみに登園し、その様子を見ていた友達もやりたくなり、ピタゴラスイッチづくりがちょっとしたブームになった。G児は、家からトイレトペーパーの芯を持って登園し、その姿を見てR児も翌日、トイレトペーパーの芯を持ってきた。やりたい気持ちとこれまでの経験を生かして、できるだけ自分でつくることが自信につながると考え、製作のスペースを確保した。自分でうまく切ることができると、それも楽しくなり、切っては貼ってと、どんどん進んでいった。

切ること自体を楽しんでいる子のために、別の場所に製作コーナーを設け、十分にはさみを使えるようにしたところ、ピタゴラスイッチづくりと材料が重なることなく、お互いがやりたいことを楽しめる環境になった。

この日の振り返りでは、ピタゴラスイッチをつくっていた子は自分の作品を紹介し、別の製作をしていた子は自分のつくったものを紹介し、お互いの楽しんでいる遊びのことを確認していた。

エピソード3 「お姉ちゃんの、すごい！」

ピタゴラスイッチづくりに夢中になっている折、中学生の職場体験があった。手を加えてほしくないと思う反面、子どもたちはお姉ちゃんと一緒につくることも楽しんでいたので、中学生と一緒に作るコーナーを設け、子どもたちがつくったものには手を出さないようにお願いした。

やはり、中学生がつくったものは、自分たちがつくったものより転がりがよいため、みんなどんどん中学生がつくったもので遊び始めた。つくることに夢中だったK児でさえ、つくる手を止めて転がすことを楽しんでいた。今日は、自分たちでつくることは難しいかもしれないと思っていたところ、

K 児：「お姉ちゃんのは、こうなって、こうなって、こうなってた！」

とジェスチャーで「く」の字を表現して教えてくれ、それを真似してまたづくり始めた。

具体的なイメージをもってつくったものは、「く」の字にはならないながらも、なだらかな傾斜で転がりもスムーズになっていた。

振り返りの際に、K児がジェスチャーでみんなに伝えると、他の友達も中学生のつくったものを見て納得し、3歳児なりに、なぜ中学生のつくったものがおもしろかったのかを理解している様子だった。

エピソード4 「こうするといいんや！」

何日もやっているが、なかなか傾斜をつくれず、どんぐりがストーンと床に落ちてしまう子もいた。そこで、壁につくるのではなく、机の脚を片方折り曲げ、斜めの状態で作れるように用意した。すると、今までよりつくりやすかったのか、さらに楽しそうにつくり始めた。

K児と同じように夢中になってつくっていたH児は、つくっては転がし、直しては転がしと、試しながらつくり進めていた。コースの途中でどんぐりが止まってしまうと、

H 児：「ここに当たっているからや。こことこの間があいているから、飛び出してしまうんや。」

と確認しながら修正していた。転がり方を見て少しずつ調整する子、まずはつくり、できたら転がす子という具合に、同じように見えても、つくり方は、その子によって全く違っていた。

振り返りの際に、H児のやり方を紹介すると、「僕もそうやってる。」「明日、そうやってみよう。」と興味津々で聞いたり、取り入れようとしていたりしている姿が見られた。

エピソード5 いろいろな発見とたくさんの育ち

保育者がトイレでトイレットペーパーの芯を見つけて持ってくると、

H 児：「それ硬いよ。」

とひと言。茶色の芯は、切るときに硬くて、家から持ってきている白い芯の方が切りやすいと説明してくれた。自分が実際にやってみて気づき、それを生かして遊びを進めていることに気付かされた。

また、転がす中にも子どもたちなりにルールができていた。

「〇〇ちゃん、どんぐり2個持ってる。どんぐりは転がす1個だけ持ってるの。」

と、みんなで遊べるように1人1個というルールが知らないうちに決まっていたり、つくっている友達の様子を見て、遊ばせてもらえるかどうか声をかけるという共通認識ができていたりした。つくりたい、転がしたいという強い思いがあるからこそ、ルールをつくったり、守ったり、忘れてしまって指摘されると素直に従ったりするのだろうと思った。

年下の子がやってくると、自分がつくったもので遊ぼうとしてくれることに喜びを感じ、

「転がしてもいいよ。」「ここがスタートやで。」

と優しく声をかける姿も見られた。

つくることをあまり得意としない子も、転がす楽しみを味わうことで、

「ピタゴラスイッチやりたい」

と興味をもってきた。

【考察】

保育者がつくった転がす装置をきっかけに、自分から意欲的に取り組む姿、他のクラスへ材料をもらいに行く姿、必要なものを自分で持ってくる姿、これまでに培われた知識や技能を生かしながらかつくり上げようとする姿、つくる中で様々なことに気付いていく姿、気付いたことを使って工夫する姿、何度も試しながらあきらめずにつくり続ける姿、ルールをつくり守ろうとする姿、年下の子を思いやる姿など、子どもの姿の中に様々な学びを見取ることができた。

子どもの学びを見取ろうとすることで、保育者自身の動きも見えてきて、この遊びに取り組んでいる子もそうでない子も楽しめるように配慮したり、声をかけるべき場面と見守る場面とを自分なりに考えるようになったりした。

また、これまで何気なく行っていた振り返りの時間だったが、今回、子どもたちの気持ちに気付いたり、どんな願いをもっているのかが垣間見え、その思いに寄り添うきっかけとなったりしたことからも、振り返りにもねらいをもって臨むことの大切さを感じた。

この遊びを通して、どんぐりの大きさや重さによって、転がり方が違うことに気づき始めている子もいる。気付くことで、ただ集めることだけに夢中だったどんぐり拾いが、「速く転がりそうなどんぐりを見つけたい。」「コースから外れずに転がりそうなどんぐりを探そう。」と目的をもったものになる予感がしている。

実践に向けて学ぶ視点

自分でもつくれそうだからつくってみようという意欲は、用具を操作することができるようになってきたり、自分でできることを自分でしようとしたりする育ちのつながりの中から生まれる。特定の大人との関わりによる安心感から、やりたいことをやってみようとする気持ちが生まれ、これまで大人と一緒に様々な活動に取り組んできた経験をもとに自分だけでもできそうだという自信が育まれる。

保育者のつくったもので遊ぶと楽しいという経験と、身近な素材を使ったら楽しいものがつくれるという経験とがあるからこそ、このような遊びに発展するのであり、これがさらに4歳児の育ちにつながっていく。

中学生の職場体験によって、子どもにとって素敵なモデルがもう一つ増えた。この経験は、子どもにとってはあこがれの気持ちを抱き、新たな挑戦の意欲を促すきっかけとなり、中学生にとっては、自己肯定感を高めることにつながっていく。「やってあげる」「やってもらう」だけの関係にとどまらず、お互いの学び合いが生まれる活動は、幼児教育と小学校教育の接続にもつながるところである。

どんぐりを転がそう

園庭にどんぐりが落ちる季節になった。夏に雨どいをつなげて砂、水、石ころ、葉っぱをそうめんに見立てて『流しそうめんごっこ』を楽しんでいた4歳児が、今度はどんぐりを転がす遊びを楽しむようになった。相談してコースをつくったり、転がして楽しんだりなど、参加の仕方は様々だが、これまでに遊んできた経験を生かして、繰り返し楽しむ中で、どんどん遊びが展開していった事例。

エピソード1 「どっちがよく転がるかな」

築山の上にタイヤを積み上げ、雨どいを2列に並べてどっちがよく転がるかを試してみた。雨どいのつなぎ目が、どんぐりを転がすたびにずれて外れてしまうので、何度もつなぎ直していた。

「またずれた。」

「ここ、直すわ。もういいよ。」

「あ、ちょっと待って」

と、直しては転がすことを繰り返していた。そのうち、斜面の少し緩やかな方向に雨どいを向けると、その先には木が立っていて、その枝のまたの部分に雨どいを立てかけることを思いついた。木の両側からどんぐりを転がせるコースをつくり、それぞれから転がったどんぐりが合流することを楽しんでいた。

エピソード2 「ゴールまで転がそう」

K男は、どんぐりを転がす遊びが気に入っていて、この日は一人で雨どいを並べ、転がった先にバケツを置いて、どんぐりが入るようにコースをつくり変えては試していた。しかし、想像していたようにはうまく転がらず、途中で止まってしまう。その様子を見ていた3歳児が

3歳児：「バケツ、こうやったらいいんや。」

とバケツを横向きにしてみたり、

R 男：「こっちの鍋じゃないとうまくいかんって。」

と、バケツより高さのない中華鍋に替えたりしてみた。しかし、K男が期待していたのは、うまく転がることであり、ゴールにあるバケツを触っても、転がしたどんぐりはやはり途中で止まってしまうていた。

H 男：「こうすればいいんじゃない？」

と、H男がスタート位置である雨どいの端をかごに乗せ、スタート位置を高くし、勢いがつくようにすると、どんぐりがよく転がるようになり、途中で止まることはなくなった。うま

く転がるようになると、アイデアが次々と浮かび、

K 男：「こっちへ行ったら○点、こっちは□点っていうことね。」

と、ゴール地点の地面に数字を書いたり（点数のつもり）

H 男：「トンネルを通過してどんぐりがスタートしま〜す。」

と、スタート地点にトンネルをつけ、どんぐりがトンネルを飛び出して転がり落ちるように変化をつけたりし始めた。点数をつけ始めたことで、ゲームの要素も付加され、そのうち、自然に簡単なルールができ上がり、どんどん楽しくなっている様子だった。

エピソード3 「もっと早く転がそう」

普段はその日に拾ったどんぐりを使って遊んでいたが、

保育者：「みんなで集めておいたどんぐりも遊びに使っていいよ。」

と伝え、箱いっぱいのだんぐりを出しておいた。

K 男：「これはダメや。これはオッケー。」

と、虫に食われたり、穴が開いていたりしないものを十分観察して分類した後、築山にタイヤを運び、雨どいで急な斜面と緩やかな斜面の2方向のコースをつくり始めた。見た目には、転がりそうな形になっているものの、雨どいの組み方が逆になっているので、どんぐりを転がすたびに継ぎ目で引っかかってしまっていた。K男がとこの組み方に気付く様子はなく、何度も引っかかったどんぐりを手で押しては転がしていた。K男の様子に気付き、K男が自分で何か発見するのを待とうかとも思ったが、先日一緒に遊んでいたH男が何かのきっかけを与えてくれるかもしれないと思い、別の遊びをしていたH男に

保育者：「K男君が、どんぐり転がし始めたよ。」

と声をかけた。H男はK男の様子を見に行くと、すぐに雨どいの組み方に気付き、何も言わず、どんぐりがスムーズに転がるようにといを直した。K男は、H男がコースを触る様子に気付いたものの、特に何を言うわけでもなく、H男がコースから手を放すまで待っていた。H男が雨どいを組み替えたことで、どんぐりはスムーズに転がるようになり、転がるようになったことで、二人でさらに改良を進めていく姿が見られた。

緩やかにコロコロと音を立てて転がるコースと、ちょっとジャンプしながら勢いよく転がるコースが完成し、2つのコースを交互に転がし、転がり方や速さなどを比べていた。何度か試してみて、勢いがつきすぎて、ゴールの後も転がってしまわないように、雨どいの先に、砂すくいを置いて、どんぐりを受けられるようにもした。

エピソード4 「もっといっぱい転がそう！」

S 子：「ほら見て！私も入れて。」

と、S子がたくさんのどんぐりを入れたバケツを持って遊びに加わった。緩やかなコースで、

Y 子：「ぜ～んぶ、転がしてみよう！」

と二人でどんぐりを一気に雨どいにあけると、おもしろいくらいに一気に音を立てて雨どいを転がり落ち、砂すくいの中に入った。どんぐりをバケツに戻して再度やってみようとする、

Y 子：「次は、砂も流してみよう。」

と提案し、砂とどんぐりを一度にあけた。今度もどんぐりは一気に転がり、その様子を追いかけながら

K 男：「これが一番やった。」

と速さを見極めていた。砂は、うまく滑り落ちず、途中からはゴールまで手で押すことになった。どんぐりと砂の性質の違いがはっきりしたことで、次からは砂と一緒に入れることはなくなった。

エピソード5 急なコースでの楽しみと緩やかなコースでの楽しみ

緩やかなコースでうまくいくようになったので、今度は、急なコースの先にも砂すくいを置いてみた。試してみると、どんぐりがジャンプして砂すくいを飛び越えてしまった。

K 男：「うわ～。どんぐり、ジャンプした。もっと並べないと。」

と、砂すくいを3つつなげて並べておいた。

転がり方によってうまく入る時と、砂すくいを飛び越えていく時とがあり、予想外に勢いがついたり、跳ねたりする様子がおもしろいようで、男児数名が集まってきて参加し始めた。

「これ、もっと飛ぶようにしよう！」

とさらに飛ぶようにタイヤを置いてジャンプ台をつくり、ジャンプで飛び出したどんぐりがタイヤの輪の中に入ってゴールとなるように、新しくコースを改良し、楽しんでいた。

H 男：「僕はこっちでやろう。」

と、H男はS子と協力して、再度緩やかな斜面

を使ったコースをつくり始めた。ゴールには急なコースと同様、砂すくいを3つつなげて並べ、たくさんのどんぐりを一度に転がして、ジャンプするか試しているようだった。

H 男：「1個ずつ転がすより、すごい勢いで転がっていく！」

と、一度にたくさん転がす楽しさを友達に伝えながら遊びを続けていた。

【考察】

どんぐりの大きさ・形・数、傾斜の角度、といのつなぎ方、長いコースを転がり続けるための条件等、様々なことに気付き、気付いたことを使って遊びが進んでいった。どうしたらもっとおもしろくなるかと考えたり、何度も試したり工夫したりする姿も見られた。これこそ遊びの中で主体的に学ぶ姿だと実感した。

K男のやってみたいという思いに共感し、H男が上手くいくように自分の知識をフル回転して遊びを発展させていき、それを共有することでK男の純粹に嬉しい楽しい気持ちがH男にも伝わって、楽しさが倍増していった。友達と一緒に遊ぶからこそ、実現できることもあり、人との関わりの中でこそ学びがつながっていくことを実感した。

この遊びでは、保育者はほとんど声かけすることなく見守っていた。しかし、子どもたちのもつ力が発揮できるように、必要なものが自由に出せる環境を準備したり、保育者が助けるのではなく、友達同士で支え合い、考えを出し合えるような支援をしてきたつもりである。今後も、必要な環境を構成したり、周りの友達に働きかけたりしながら、本当に必要な時に必要な手助けや声かけができるよう、子どもの学びを見取っていききたい。

実践に向けて学ぶ視点

環境に主体的に関わることで、遊びがどんどん発展していく。やってみたい、こんなふうになりたい(発意)という強い思いがあり、その思いがあるから、多少うまくいかないことがあっても諦めずにやり続ける。どうやったらできるのか(構想)と自分なりに考え、こういうふうにやってみよう(構築)と段取りを決め、実行する(遂行)中で、友達との関わりによってアイデアが浮かんだり、保育者の支援によって諦めずに取り組んだりすることもある。やってみたことで、うまくいったりいかなかったりする体験を通して、どうしてうまくいかなかったのかを考えたり、もっとおもしろくするための方法を考えたり(省察)して、次への挑戦(発意)が始まる。

それぞれが楽しみ方を見つけ、それぞれが気付きをもって次への遊びを生み出していく。転がし遊びを通して、一人一人が目の前の課題を解決し、やり遂げようとする中で、集団としての学び合いも育まれていく。

「ドッジボール、やりたい！」

友達と一緒にルールを守って遊ぶ楽しさを味わってほしいと考え、昨年度の年長児がやっていたドッジボールのことを思い出すきっかけとなるように、ラインを引き、ボールを準備した。ルールありきのドッジボールではなく、子どもたちが遊びを通して、「ああした方がいい。」「こうやって変えよう。」と話し合いながらルールをつくり上げていく楽しさを味わいながら進んでいった事例。

エピソード1 「前の年長さんがやってたドッジボールだ！」

園庭に引かれたラインとボールを見ると、

「あ、前の年長さんがやっていたドッジボールや。僕、知ってる。」

保育者：「どんなことを知ってる？」

「手で投げるの。足で蹴るのはなし。」

「こうやってするの。（と、投げる真似をする。）」

「ボールが当たったら、外に出る。」

「投げるときとか、逃げるときに、線から出たらダメ！」

等々、あこがれをもって見ていたからなのか、よく覚えていた。

A 男：「先生、やりたい！やってみよう！」

と言うので、実際やってみることにした。

やってみると、最初は、ボールを投げることや逃げることを楽しんでいるだけだったが、そのうちボールが当たると、当たる場所によって

B 子：「顔に当たったのは、セーフ。」

C 男：「頭もセーフにしよう。」

と口にし始めた。意見が出るたびに保育者が、

保育者：「顔に当たってもセーフってことだね。頭もセーフなんだね。」

と確認しながらみんなに伝わるようにしていった。すると、ボールを取ろうとしたB子を取り損ねて手のひらに当たってしまった。

B 子：「手はセーフだよ。」

と言うのを聞き、保育者はさすがにそれはあり得ないだろうと思いつつ見守った。

D 子：「B子ちゃん、今当たったよ。」

B 子：「でも、手はセーフだって。」

E 男：「顔と頭がセーフなんだから、手もセーフでいいんじゃない？」

A 男：「うん、手はセーフや。」

D 子：「それもそうやな～。手もセーフにしようか。」

保育者：「手はセーフなの？」

と確認すると、

「うん！」

と一斉に返事が返ってきた。手はセーフということでドッジボールは進められることになった。

今回は、みんなでルールをつくっていくことを大切にすると決め、既成のルールを教えることはやめた。B子は力で他を圧倒させているところがあるので、最初からどんどんボールを取っては投げていた。そのB子が当たった時のルールにみんながのった。その方が、自分もやりやすいと思ったのか、B子が言ったから同調したのかは分からないが、その後、B子はバレーボールのレシーブのように、手に当ててボールをはじいたり、取ったりするという技を編み出した。

エピソード2 「誰が取りに行く？」

セーフの箇所が多く、微妙な当たり方をすることもあり、保育者は、本人に確認しながら審判をすることにした。「当たった？」と尋ねると、どの子もしばらく考えるのだが、「今のは手だった。」等と伝えるようになった。本人の言ったことは絶対であるという立場で保育者が臨むと、他の子もそれを受け入れながら進んでいた。

ボールが当たったら外に出るというルールなので、最初はみんなが内野にいる。ゲームが始まってすぐにボールが転がって外野に出てしまった。ボールを追いかけていく内野の子と、反対側にいる敵の外野の子。

保育者：「えーっ？そのボールは誰のボールなの？」

と聞くと、みんな止まって考える。

D 子：「え？あれ、誰が取りに行く？」

C 男：「白組は外（野）の人がいない。先生取ってきて。」

保育者：「先生は白組じゃないから行けないよ。」

A 男：「じゃあ、赤組さんの外の人を取りに行く？」

保育者：「赤組のボールなの？」

C 男：「違う！白組のボール。でも、みんな中にいるから、誰も取りに行けん…」

B 子：「じゃあ、私が外の人になって、取りに行く。」

と、B子が動き出した。それを見て、

A 男：「始めから外にも人がいるといいんや。」

と言ったので、次のゲームからは、外野にも最初から人がいるようになった。実はこの時、子どもたちには、ボールが当たったら外という概念はあったのだが、迷わず自分の陣地の外側に出た。すると、外野から味方の内野に向かってボールを投げて当たってしまうという場面が見られた。

E 男：「僕、仲間やのに、仲間に当てんといて…」

との声で、仲間意識に気付き、味方にはそっと投げてパスしたり、外野から、相手の内野近くぎりぎりまで行って、敵をねらって投げたりするという姿が見られるようになった。

エピソード3 「どいて〜！」

A 男：「ドッジボールやろう。」

と誘い合って、ゲームを始めた。外野にいる子がボールを投げようとしているが、味方の内野の友達が邪魔になり、「どいて〜！」と困っている。ボールを投げると、味方にボールが当たってしまった。どちらも不満な顔をしている。何か気付く場面だと期待して、話し合いの時間を取ることにした。

F 子：「私がボールを投げようとしているのに、みんながボールちょうだいって前から来るから、投げられない。」

保育者：「そうだったの。投げられないと思ったけど、投げたら味方に当たっちゃったんだね。ボールが当たったら、味方だけど外野に出ないとダメだもんね。困ったね。」

A 男：「端っこまで行って投げればいい。」

C 男：「でも、すぐに投げた方がいい。」

保育者：「何ですぐに投げた方がいいの？」

C 男：「すぐに投げた方が当たるんやって。」

保育者：「へ〜、そうなんだ。ボールを持ってからず〜っと端まで走っている間に、敵は逃げちゃうもんね。じゃあ、こんなのはどう？」

と、ここで初めて、外野の場所が入れ替わった方が敵に当てやすくなることを図示しながら説明した。

A 男：「それいいね！」

とすぐに、外野の場所を入れ替えて、ゲーム再開となった。ねらって投げて、ボールから逃げることを繰り返すうちに、「当てたい。」という気持ちが高まってきたからこそその悩みだった。既成のルールを、いつどう伝えるのか、そもそも伝えるべきなのか、と悩みに悩んで、ここで伝えた。

エピソード4 「僕、当たってない！」

とにかく逃げることに一生懸命のE男は、いつも最後の方まで内野に残っている。ところが、ボールが当たった時に「今のは手だった。」「当たってない。」と通そうとすることが目立つようになってきた。自分で当たったかどうかを伝えるという約束であったため、E男の言い分を聞いていたが、足に当たったのは明らかだった。

子どもが「当たってない。」と言った時、当たったことを認めるのが嫌だから「当たってない。」と言う場合と、本当に気付いていない場合があるのだろうと思う。一生懸命逃げているので、当たっても気付かなかったり、手に当たったのか胸に当たったのか分からないという場合もあったりするようだった。一つ一つの問題を丁寧に取り上げるため、スピード感やドキドキ感がなくなり、ゲームとしてのおもしろさが薄れてきていることは明らかだった。

エピソード5 「おにごっこがいい！」

A 男：「ドッジボールやろう。」

との声が今日も聞こえる。しかし、

B 子：「えー。おにごっこがいい。」

という声が聞こえた。今までは、全員一致でドッジボールをしていたけれど、保育者が感じたように、おもしろさが感じられなくなってきている子がいるのは明らかだった。ゲームとしてのおもしろさを伝える時が来ていると感じた。

保育者：「先生も入れて。」

A 男：「いいよ、いいよ。こっちに入って。」

保育者：「先生は、白組に入るよ。」

A 男：「えー、なんで？」

保育者：「だって、白組さんは、1人少ないもん。」

D 子：「ホントだ。じゃあいいよ。」

人数の差にも気付いてほしいと伝えてみると、すんなり受け入れられた。

仲間に入り、ボールを取ったらすぐに投げるということを繰り返すうちに、ゲームにスピード感が出てきた。キャーキャー言いながら逃げていたのもつかの間。まねをして、すぐに投げようとする子が出てきた。時折、ボールの取り合いになったり、ボールを長く持ったままでいたりすると、

「早く投げて。」

と声をかける子も出てきた。また、

「ぼく、当たってない。」

などと言っていると、すぐに、ボールを当てられてしまうため、ボールの動きをしっかりと見てどこに逃げるかをすばやく判断して動く子も多くなった。試合終了の合図に、

「あ〜、おもしろかった。もう1回しよう！」

との声が上がり、すぐさまもう1回ゲームが始まった。

エピソード6 「ホールでもやりたい！」

ドッジボールの楽しさが伝わってきたと思っていたが、あいにくの雨。でも、子どもたちの思いが途切れないようにしたいと思い、ホールでやってみることにした。

コート大きさは、外でやるときの半分。内心、あまりおもしろくないかもしれない、と思っていたのだが、始まってみると、子どもたちの動きがとても素早いことに気が付いた。コートが狭いため、投げたボールが威力を保ったまま敵に届く。もちろん、敵との距離も近い。ドキドキ感が増す上に、広いコートでは、敵にボールが届かない子が、どんどんボールを捕っては当てていき、生き生きとしてとても楽しそうである。また、問題が起きた時も、外のように周囲の遊びが気になることもなく、集中して話し合うことができるようであった。同じドッジボールだが、場が違うだけでまた違う能力を発揮する子どもが出てくるのはすばらしい発見だった。ホールは狭いからできないという思い込みは、実にもったいないことだと実感した。

エピソード7 「みんなに教えてあげる！」

午後、のんびり絵本を読んでいる時間に、B子がとても嬉しそうに本を見せに来た。

B子：（小声で）「先生、見て！」

『やりかた ずかん』という本に『ボールの投げ方』というページを見つけていた。

保育者：「うわーっ！これいいね。」

B子：「うん！白組のみんなに教えてあげるね。」

と、味方の友達を一人ずつそっと呼び、そのページを見せていた。「手はセーフ！」と言っていたB子が、図鑑で投げ方の方法を見つけて仲間に知らせていた。その姿から、子どもにとってドッジボールを含めた遊びは、遊んでいる時間だけのことではなく、生活の全てにつながっていると感じた。子どもが育つ場は時間割のように区切ることはできず、生活丸ごとが育ちの場であると感じた。

【考察】

これまで、「〇〇はこういう遊び方をするもの」という既成の概念を保育者がもち、子どもたちに押し付けていたのかもしれないと感じた事例だった。友達と一緒にルールのある遊びを楽しめるようになってきた年長児にとって、ドッジボールやおにごっこは、ドキドキするけど楽しいし、悔しいけどまたやりたい遊びである。そこに「ルール」自体をみんなできくり出していくという楽しさが加わった今回の活動だった。

ドッジボールという遊びも、去年の年長児と今年の年長児では取り組み方が違ったように、活動にどのようなねらいをもつかということが重要となってくる。保育者の役割も一つではなく、時には審判として、また、時には仲間として子ども相手でも容赦なく挑んでいくことも、特に年長児にとっては必要だと感じた。今後も子どもたちの姿をしっかりと見取りながら、共に成長していきたい。

実践に向けて学ぶ視点

ルールのある遊びは、ルールを先に教える場合と、今回のように、以前目にしたことを思い出しながら自分たちでルールを考えていく場合がある。ルールを先に教えることで、みんなが安心して取り組める。自分たちでルールを考えることで、自分たちに合ったルールができ、みんなで楽しめるものに変化していく。

この事例では、既成のルールをいつ伝えるべきか、伝える必要があるのかという年長児担任ならではの葛藤が見られる。

その中で、保育者が審判になったり仲間の一員となったりすることで、子どもたち自らがドッジボール本来のおもしろさに気付いていった。保育者は、子どもの姿を見守り、タイミングを見て支援することが大切であり、それがきっかけとなり、子どもたちは、自分たちで考え遊びをつくり出そうとする。その力を引き出すことこそが保育者の役目と言える。